

〔研究ノート〕

天に軌道がある如く (3)

——「稲星フォークロア」をめぐる——

青 木 郁 夫

唯わが心は、時に離れ間に隔り、
恰も彼の芒星と呼べる、君の、
己れの軌道を、何に物煩なく駆奔る如きを
こそ楽しまんとするなれ。

北村透谷「蓬莱曲」(1891年)より

はうきぼし王座につかずかの虚空翔る自在を喜びて去る

石川啄木 (1907年)

序

I 方法

II 物語のはじまり——寛保2(1742)年と
寛保3・4年のほうき星をめぐる

(以上、第59巻第2号)

III 物語は展開したか——明和6(1769)年
のほうき星をめぐる

IV 物語は再興し得るか——文化8(1811)
年のほうき星をめぐる

1. 文化4年のほうき星をめぐる

(以上、第60巻第1号)

IV 物語は再興し得るか——文化8
(1811)年のほうき星をめぐる

2. 文化8年のほうき星——「『稲星』フォー
クロア」の時間と空間

2a 『やせかまど』——「彗星つほうき星(=)
稲星=豊年」『やせかまど』[1972]の記述を再
確認してみよう。太刀川喜右衛門は「文化八未
の歳秋七月中旬より、ほうき星見へし」と書き
出し、ほうき星が日をおってどのように見え
たかを述べ、「斯かる天変のあるは、善なること
なしと人々あやしみけるか」と続けている。つま

り、このほうき星を見た人々が、「これは長星
だ」とか「これは稲星だ」とか、口にすることは
何も書かれてはいない。そして、このほうき星
の出現という「天変」は「善なることなし」と怪
しんだ、つまり凶兆視したことが述べられている。
したがって、この地方には、この時点では
「箒星=稲星=豊作の兆し」フォークロアが伝
承されていなかったことになる。だから、喜右
衛門は「却而」と続けて「豊作の兆しなりしや、
田畑共に實りて」と、ほうき星は「善なること
なし」「凶兆」ではなく「豊作」をもたらしたのだ
と述べているのである。そして、喜右衛門の「時
代認識」を示すかのような記述の後で、「箒星も
いつしか稲星様と愚民の敬へしも、理の至る処
か」と述べている。つまり、文化8年のほうき
星出現とこの地域での豊作の経験から、これを
起点として、「いつしか」、「箒星=稲星=豊
作の兆し」フォークロアが生まれ、伝承されるよ
うになったのである、と読み取れる。おそらく
文化4年8月に出現したほうき星であろう「前
四五年以前にも、小さな箒星現れし」とあるが、
その時の状況については全く記述がないことか
ら、そう言えるであろう。

前出の『藤岡屋日記』[1987]が、文化4年の

ほうき星については「先年出候ほうき星ハ筋の中ニこまかなる星多く之有候」であったのに対して、文化8年のほうき星が「大きな星ニ而ぼつと煙り之ごとくあかり出候」、「此度出候は煙の如く出候事ニ而、稲星と申もの、よし」(p.123)としていることに、『やせかまど』での喜右衛門の認識は似ている。彗星=ほうき星の見た目の形状の違いにすぎないのだが。但し、『藤岡屋日記』は文化8年の彗星を「ほうき星と云也」としたうえで、その見た目の形状から「稲星と申もの、よし」と言っているだけであって、それが豊作の前兆だとも、吉凶禍福の何らかの前兆だとも言っていない。このことはしっかり確認しておくべきである。

さらに、喜右衛門は文化8年のほうき星の観測記録を示した後で、『和漢三才図会』その他漢書などのほうき星についての記述を踏まえ、「天変は能きことは見へず、然れ共豊作の歳に逢うは稀なることなるへし、凶変して吉になりしや」と述べ、「ほうき星=凶兆」視を転じようとしている。この地域において「いつしか」、「彗星=稲星=豊作の兆し」フォークロアが生まれ、伝承されたとして、文政2年5月や文政6年11月、さらに文政8年8月に出現したほうき星の時にも「彗星=稲星=豊作の兆し」フォークロアは繰り返して継承され、農作物の作況という現実もまたそれを実態化したのだろうか。

『やせかまど』付録の記事には「文政7年」のものがあるというし、喜右衛門が他界したのは文政12年10月[『小千谷市史 史料編』, 1972, 凡例]といわれるから、何故、文政期のほうき星出現時の状況について何らかの手記・記録を残していないのだろうか。

因みに、文政6年9月に越後国魚沼郡小千谷組下条(上組・下組)村(会津藩領、現十日町市下条)の庄屋など村役人が「田畑干害のため代金納願い」をした文書が残っている。これによれば、田畑方は「永照ニテ」「早損」になるかもしれないと甚だ「不安」であった。「小前食用ノ大根、蕎麦其外都而蒔旬後れ」「半毛」にも至らないであろう。田方についても地域によって異

なるが、「中辺方皆無同様之地所も有之」状況であった。年貢を納めるには「迎も力ニ相及」ばず、また「小前凌之便りを失い葦々当惑仕嘆罷在」状態である。「御見分御破免」、見分を行い定免を破棄して減租を願いたいところであるが、それも御法によってなかなか叶わないであろうから、「御慈悲之勘弁」を以て「石代金」納にして頂きたいと領主に願っている[『十日町市史 資料編5 近世二』, 1994, pp.499-500]。彼らは、喜右衛門が言うようにほうき星が稲星で豊年をもたらすものであれば、11月に現われた彗星がもっと早く現われてくれればと思ったであろうか。

2b 『やせかまど』の時代認識 [杉岳志, 2005, pp.213-4]は『やせかまど』に見る喜右衛門の「今太平」という時代認識を「稲星」=豊作・豊年の前兆論の構成要素として重視している。『やせかまど』に記されているのは、文化元年のロシアが通商を求めたレザノフら遣日使節の来航、同4年5年に起きたロシア船による樺太・エトロフ等など蝦夷地への侵攻と、それに対する幕府による会津、仙台、南部、津軽、秋田、庄内など諸藩の出兵命令などについて「いろいろの風評すれ共、我如き土民委しく尋ね問ふへきにもあらず、然かし實事なりしにや」と思っていたが、「越中富山これ城山大和守殿急々御通行の節は、往還筋人馬差支なき様の手當致し置くへき趣御觸れのあらは、風説はかりにもなきことにや」とこの事実を認識したうえで、「今太平の御代に生まれ合わせ、軍役に煩ふこともなく、百姓は農業にさい出精すれば、飲食、着かふりものに不足なく、安楽に暮らし居るこそ、国王の恩沢いふへくもなし」という時代認識である。「今太平の御代」以下の認識は、兵農分離を前提にした領主制並びに幕藩制の支配論理であり、それに組み込まれた村役人を担う上農層の支配イデオロギーそのものである。

それはさて置くとして、[杉岳志, 2005]がこうした認識が「稲星」=豊年前兆論を構成する要素だとして対象課題を「展開」することは、課題を「拡散」するだけであり、そのことは主題か

Mar. 2025

天に軌道がある如く (3)

ら離れることになりかねない。[同上, p.213]に「豊作という事実もさることながら、凶事が生じていないとの認識が、凶兆から吉兆への転換に不可欠であった」と述べているように、「今太平の御代」へと対象が拡散すれば、論理として、1) ほうき星・稲星が豊作をもたらさなくても、不作・凶作でなければよいことになり、「稲星フォークロア」の稲星＝豊作の前兆から離れていくことになる。2) 「稲星」が「今太平の御代」をもたらすことはないので、「今太平の御代」にほうき星が現われ、それが凶事をもたらさなければよいことになる。つまり主体・主語が転換してしまうことになる。

現実としても、「軍役に煩ふことなく」ということは直接的に軍勢力を担うことがないということだけのことであって、北辺の防備に動員された諸藩では御用金や人足としての夫役が課されたほか、動員諸藩の軍役のための人馬武器の搬送のために助郷、場合によって加助郷による負担が過重された。動員された盛岡藩に属する陸中国和賀郡沢内の『沢内年代記』文化4年・5年の条[沢内村教育委員会, 2000, pp.82-6]には、ロシア将兵による松前エトロフへの侵攻とその対応の状況が相当詳しく記述されており、こうした情報は次第に地域社会、そして江戸を経由して各地に拡散していったと考えられる。そこには「人足」を盛岡城下に出したことも記されている。また、花巻の『又右エ門家文書 年代記』[1991]文化4年の条には「掘田摂津守様松前御登被遊。当村方人足百人出、馬貳拾五疋。三月登、九月廿四日下り。人馬これ通出し」と、同5年の条には「正月方会津仙台御家中松前御登二付、弓鉄砲大鉄砲車二乗せ、引村々方人馬繫其数不知出シ」(p.44)と記録されている。また同じく動員された仙台藩に属する陸前国加美郡中新田村(現加美郡中新田町)の氏家家の暦書込日誌「備忘録」[1997]文化4年の条に「六月廿五日ヨリ松前二騒動アリ、松前様取り替」、文化5年の条に「松前騒動ニテ人足働往來人馬在々人馬迄大キニ迷惑セリ」「正月十七日ヨリ愛知様松前二御下り、夫ヨリ次第二諸大名ハ

日々下り、在々人足共々ニ相働キ」(p.778)と記されており、村々の人々が「軍役」の一端を担ったことが分かる。

喜右衛門の時代認識は、論理的にもまた実態論としても、例えば、杉田玄白がロシア論・対ロシア政策なども論じている『野叟独語』[1976](((文化4年9月下旬以後執筆,「此時節、世將乱の兆し見へたる様なり。専中興の御政道を行ひ可給御時代かと存る也」(p.293))などの晩年の書(一種の「蘭・洋学的社会批判・経世論」))),あるいは大槻玄沢が主にイギリス論・対イギリス政策を論じた『捕影問答』[1976a](前篇は文化4年、後篇は文化5年)に表われた、列島をめぐる国際環境の変化についての理解に基づく時代認識との落差は、あまりにも大きい([佐藤昌介, 1976, pp.627-39]参照)。

3. 「荒蒔村宮座中間年代記」と『甚太郎一代記』——「彗星つほうき星(＝稲星)→豊作, or→凶作, or→?」

3a 「荒蒔村宮座中間年代記」——「彗星つほうき星→凶年」『やせかまど』の記述と全く対照的なのが、[「荒蒔村宮座中間年代記」, 1958, p.411]の文化8年のほうき星に関わる記述である。この年のほうき星については、「ほうきほしの出候月者、七月下旬より十月下旬迄有」と記録されている。文化8年の条には6月15日の大雨・洪水とその被害状況が詳述されている。この大雨により、大和高原から大和国中に東側より流れ込む河川のほとんど、すなわち北は南都・春日川から、南は初瀬川に至るまでの河川で洪水・川筋切れが生じ、水没・交通遮断・山崩れ・田畑の流れ・人家の崩壊流れ、水死者が夥しく出た(「依此諸々人々数万死ス、其故川せ施畏(餓鬼)川筋諸々ニ有」とあるが、これは伝聞の域を出ないものであろう)。十市郡上品寺村(郡山藩領、現檀原市上品寺町)の『諸事覚書』[2014]にもこの大雨・洪水のことが記されており、「其外右(初瀬)川筋三輪并おいすミ(大泉)辺田地迄流候事、筆紙つくしかたい前代未聞希成事ニ而諸人大キ恐候」であったとい

う (p.107)。

『奈良縣氣象災害誌』[青木滋一, 1956] によれば、大和国では文化8年5月6日に洪水があり、そしてこの時期に備前備中諸国に大雨洪水があった (pp.247-8)。6月15日の大洪水は「俗に初瀬流」と言われるもので、「大洪水は局地的な雷雨性驟雨であることは非常に明瞭」であるという (pp.248-51)。

大阪市史史料『あすならふ』[1988] には、この年「六月、彗星見」としか記録されていない。その6月15日には「和州初瀬風雨・洪水、人民多損」であったと記されている (p.87)。

「荒蒔村宮座中間年代記」には、ほうき星が出現する前の大雨・洪水の記録に続いて、「是全ほうきほしの出候故ニ如斯乱国ニ成、いつニ而も北ニほうきほし出ル年は必ふしきの事有」(p.411) と記述されている。「年代記」であるので手控えあるいは備忘録に拠って事後的に記述されたのかもしれないが、文化8年のほうき星に関してのみのことではなく、過去の事柄を踏まえて「いつニ而も北ニほうきほし出ル年は」と記述しているのであり、この地域においては、このことは「フォークロア」となっていたのである。

それでは、文化8年の作況はどうであったのであろうか。綿の反収は「七八十より百余であった」。これは前年7年の反収「百式三十斤より百八拾斤迄」(p.410) より見てかなりの不作であり、それゆえ、「綿作御見分有之、御用捨石ニ付壺斗壺升五合被下候」と公租の減免がなされた(文化5年の綿反収は「六七拾より壺百斤迄」であったため、「御見分」がなされ「石ニ付式斗七升」「御用捨」された (p.408))。一方、米作のほうは、「式石五六斗三石余り」で、前年の「三石式三斗より四石迄出来」に比べればかなり不良であるが、文化4年「式石より式石七斗」(p.408)、文化5年「式石四五斗」(p.409)、文化6年「式石六七斗より三石式三斗迄」(p.410) からすれば、ほぼ平年作であったと言えるであろう。

3b 『甚太郎一代記』——「彗星つほうき星 (= 稲星) → 豊作, or → 凶作, or → ?」 大和国の記録『甚太郎一代記』[1994] には、やはり6月15日の大雨・洪水の様相が描かれ、それに次いで「同(文化8)年7月末よりほうき星暮れ方戌亥出、其星少く月の廻り程薄キ輪あり、夫より東へほうきのことく後光さし、初夜時ニハ戌亥へ入見へ不申、又明六ツ前より丑寅ノ方へ右之通ニ而相見申候、是善惡式つの前表と人ミな申ふらし候」(pp.115-6) とあり、ほうき星を「稲星」と呼んでいないし、ほうき星を吉兆とする者もいれば、逆に凶兆とする者もいたとしている(子の利右衛門は「吉川利右衛門古記帳」の嘉永6(1853)年「順気并ニ珍事書記」のなかで「同年七月十日頃方西戌ノ方へほうき星出申候、最早下旬ニハ相見へ不甲候、右善惡共前表相不分候」(p.214) と書き残している。ほうき星が吉凶いづれの前表であるかなど分からないとしている)。つまり、彗星つほうき星 (= 稲星と呼んだ者もあるかもしれない) → 豊作, or → 凶作, or → ? ということであつた。

3c 諸国の状況 文化8年の作柄は、『草間伊作筆記』[草間直方, 1911, p.880] によれば、「全国豊熟であった」という。しかしながら、地域によって異なる状況があることは列島の諸条件からして当然のことである。『日本の気象史料(1)』[中央气象台・海洋気象台編, 1976] は、文化8年6月15日・7月14日に豊前国で大雨・洪水があったこと、7月30日に飛騨国で暴雨・洪水があったことをそれぞれ史料を引いて記録している (p.369)。前者については「田地破損」、後者については「国中所々損害あり」の文字が見えるので、何らかの農業被害があったと考えられる。

陸中国和賀郡沢内の『沢内年代記』[沢内村教育委員会, 2000] 文化8年の条に「7月より毎晩ほうき星出る。初北西の方によりたる処にいて、だんだんに冬12月に至りて、南に回^{ホウキボシ}って西に終わる也」(才時記外・草井沢本) と、彗星・ホーキ星が出現した記録がある。「稲星」という表現はないし、ほうき星がなんらかの前兆であ

Mar. 2025

天に軌道がある如く (3)

るという記述もない(『沢内年代記』には前述した寛保2年のほうき星以来いくつかのほうき星についての記述があるが、いずれも「稲星」という表現はないし、何らかの「予兆」ともしていない)。この年の作況は「世の中中ノ下」(下巾本)、あるいは「稲中作、畑物も中下」(才時記)であり、「藍苗日照ニテ悉ク不足」(下巾本)であった。ただ、「大豆上々作」(下巾本)であった。つまり、沢内地域の文化8年の作況は「中ノ下」の不作であった。そのため、年貢も上作であった2年前の文化6年の「二歩引」であった(p.87)。越後国小千谷地方とは状況が違った。

岩代国の幕領梁川(現福島県伊達郡梁川町)では、文化8年8月「南梁川・大門・関波村などでは不作」であり、10月には「凶作蚕業違作のため梁川村などは減租夫食米等の下賜」願いをした。また、相馬藩では12月「非常の節儉約令」がだされた[『福島県史 第26巻』, 1972, p.410]。

筑前国鞍手郡高野村では、『有吉記録』[中原孫吉, 1939, 第19巻第5号, p.27]によれば、文化8年は「大世間中の下」であり、「7月14日大風之模様に相成候處9つ時より大雨に相成り大洪水に而村々土手筋御田地大破に及候。凡、6,000人之惣夫損高に而秋冬にかけ大形成就と相成御田地破損。夫□り□7,000人餘にて當觸之損高夫々帳面仕立御役所へ出す」という自然災害に見舞われ、困窮状態に陥ったことが記録されている。

4. 西洋天文学に拠る「彗星つほうき星(=)稲星≠作況」

4a 馬場佐十郎記『泰西彗星論訳草』 文化8年に出現した彗星に関する文献として、和蘭通詞であった馬場佐十郎(貞由、穀里)の『泰西彗星論訳草』[国文学研究資料館, 国書データベース]がある(通詞である馬場の天文台勤務とその業績については[片桐一男, 1969]。また、大槻玄沢『蘭訳梯航』[1976b, pp.391-2]も参照)。「附言」でこの『訳草』を執筆した理由を馬場は次のように述べている。「古今の世俗彗

星の見れ、出れば、必ず凶事の変ありといふ。然るより此頃曉昏に彗星北東北西の間に見ゆれば又雑説の世に流布すること不少」であった。馬場の家職は暦学ではなかったが、(幕府天文方高橋景保が入局させた[渡辺敏夫, 1986a, p.250; pp.288-90], 幕府天文台蕃書和解御用である)蘭語訳家であったため「友人来たりて頻りと其西説を問ふ」状態なので、「燈火に筆を取りて」、イギリス人麻児釘(Benjamin Martin)が1744(延享元)年に出版した『天地萬物窮理』の大意をまとめた、と(但し、1744年は蘭訳本の出版年。蘭訳本“Filozoofische Onderwijzer”の彗星に関する部分の訳述[渡辺敏夫, 1987b, p.733]。平戸藩主松浦静山が所持していた本書の1764年版を、寛政12(1800)年10月頃であろうか、天文方高橋至時が若年寄堀田正敦を通して二日間借り受けたことが、高橋至時より間重富宛の書簡(寛政12年11月10日付)から分かる。この時、前野良沢が「珍敷」高橋宅を訪れ、書名・作者・出版地等を訳し、高橋に教えたことも知れる。高橋はこの書を「早々に戻し候故、委細に写し不申、残心千万」であったと手簡に記している。その後天文台が本書(1744年版か)を蔵し、馬場がその彗星に関する部分を抄訳するまでには、10年の歳月が流れたことになる[「星学手簡」, 1971, p.214](広瀬秀雄による解説参照))。つまり、馬場を巡る人々の間では、彗星は「凶兆」であると見なす者が多数あり、世にも様々な雑説、俗論が流布していたことが分かるし、西洋天文学の理解者から見ればこれを正しておく必要があると思慮されたのである。彗星に関する解説をしたうえで、人々の彗星=凶兆などの俗論に関しては、「問 彗星ノ體質、先生尚考究ノ論説アリヤ」の項を起し、そこで「答」として「近年漸々望観スル所ヲ以テ(馬場は実際に文化8年の彗星の観測記録をこの『訳草』に図示している)考究スルニ、彗星ハ皆其質堅硬ノ實體ニシテ、各星其濛氣輪ヲ帶纏シ各々年月日時ヲ期シテ必ス太陽ヲ一周スルモノナルヲ必セリ」としている。つまり、彗星は「堅硬」な質を持ち、一定の軌道周期をもって太陽

を巡っていると解説している。そのうえで、「怎ンソ古来人々妖言スルガ如キ吉凶ノ変ニ與リ、時テ自ラ空中ニ生シ、偶々其形見レテ光ヲ發シ其前兆ヲ告ル等ノ物ニハアラサルナリ」と、彗星が吉凶を告げ知らせることや、両者に何らかの関係性があり得ることを明確に否定している。この『訳草』は板行されてはいないようなので、書写によってそれなりに広まったとしても、おそらく、その内容は馬場の洋学者を主とした友人・知人など極く限られた者にしか伝わらなかったであろうし、そのすべての人々が納得したかどうかも分からない。

4b 高橋景保『彗星略考』 天文方高橋景保も文化8年8月に『彗星略考』（東北大学附属図書館狩野文庫、国書データベース）を著し、「古ヨリ彗星ハ皆妖星ニシテ此星見ハルレハ災變ノ徴也」と言われて来たことに対しては、『ラランデ天文書』に拠りながら、「彗星亦一惑星ナレハ吉凶焉ソ與カラン」、つまり或種の惑星である彗星がどうして吉凶と関わりがあるだろうか、そのようなことはなかりと記している。さらに、景保は天文学者として『天経或問』などにある「彗孛」の説明が「荒唐ノ理」であるとして、これを正そうとした。「西書」中に見える彗星の説明より、彗星は「一惑星」であり、「太陽ニ逼近」する長楕円軌道を「自行運動」する星であることを、また、彗星を「光芒の長さ」によって「彗孛長」の三種に分類する見方に対して、彗星の「光芒」は彗星と太陽と地球の位置関係によって見え方が変わるのであって「彗孛長トモ同物」であることを図を掲げて明らかにした。さらに、彗星の「光芒」に関する諸説があるなかで他説とともに、「此星ノ體質ハ皆永久不變堅硬ニシテ油氣ヲ帶フ」も紹介している。こうした西書に見える彗星の説明もさらに精緻に、より精確なものになっていくであろうとして、「新考曆書ノ詳説ヲ俟ツ」とした。

4c 市井の天文家の諸説 伊勢国津の商家で天文、地理、暦学を学び、本多利明や伊能忠敬とも交わった稲垣定穀の著書、蔵書が津市津図書館に収められている[津市図書館、2002]。

そのなかに、彗星運行図（箇百耳尼久数窮理）などとともに、文化8年の彗星観測記録である「彗星行度図」や、殿村庸行の「彗星説」（文化8年）などのほかに、自らが司馬江漢の「和蘭天説」や「曆算全書」中の「曆法西傳」の「彗星解」を批判的に検討した草稿（仮名彗星論）「凸頭牧人稿」がある（執筆時期不明）。江漢が彗孛が「水金ノ二星ノ外環アリ楕円ヲナス故数十年ヲ経テ現之彗ト孛ハ一星」であるとしていることに対して、彗星は水星、金星よりもはるかに大きな軌道をもつこと及び「一星」ではなく数多くの異なる彗星が存在することを提起している。また「小星相聚テ光ヲ作ル歟」に対しても疑問を呈している。稲垣定穀はこの草稿において自らの彗星論を提起するところまでには至っていないが、「誠ニ其活動（直接的には彗星だが、天文全般についても言えること）ヲ知ルハ測量ニアリ。コレヲ證スルモノハ推歩ニアリ。其理ヲ窮ルハ学ヒ思フニアリ。理者（は）数之本也、数者理之驗也。後來実測推歩ノ術ヲ得テ理ヲ思ヒ窮メン」と結び近く書き留めた科学的認識論に、彼の真摯にひたむきに真理を探索しようとする研究態度が良く現われている。

文化8年の彗星観測記録である「彗星行度図」もまさにその現われで、過去の和漢の記録を比較するとともに、彗星の観測記録に専念している（東武すなわち江戸の村田なる人物から送られた観測記録も挟み込まれている）。稲垣定穀は「彗星行度図」において、「天變ハ其国ヨリ見エテ他ノ国ヨリ見エサル者ヲ以論スヘキコトナリ、彗星ノ如キハ数万里ノ上ニ麗テ天トトモニ旋轉スルモノナレハ唐土（中国）天竺（インド）西洋トイヘトモ同シク見ル処ノ轉ナリ」と述べ、天文学が万国に共通のものであることを強調するとともに、（『増補難波戦記』にある慶長19年の彗星に関する記述に、朝鮮より来朝した儒者李文長が『武備志』に拠って彗星の出現の仕方によってそれがいかに悪星であるかについて述べたことに言及したこともあつたか）暗に天文現象と吉凶禍福とを関係させることを否定している。

京師の殿村庸行(『平安人物志』文化10年版の「奇工」の部に載る。国際日本文化研究センター、データベース)は『彗星説』[1811]を文化8年冬に著し、彗星は、蘭説にある「体中ニ在ルー箇ノ油氣ノ所為」により太陽に近づくと「油氣解ケテ太陽ニ背ケタル方ヨリコレカ火焰ノ如キ形象」の光芒が見えるという説と、「彗星ノ体ハ水晶ノ如キ透明皎々トシテ映徹ス故ニ白影アリテ彗ノ象ヲ為ス」という説とを折衷したような、「玻璃ノ圓器ニ油ヲ入タル兒(かたち)ノ如キモノ」だとしている。そのうえで、殿村はこの時点でもまだ「天動説・地球中心説」の宇宙にいたのか、それとも地球から見える日月五星諸天の動きを著す「九天図」で説明することを重視したのか(地球中心の図であるが、諸惑星が太陽を廻ることになる軌道が描かれているので、ティコ・ブラーエ説によるか)、「九天図」に齟齬しないような彗星の軌道(游輪)を「渾天周行略図」に描き、彗星の尾の光芒の「長短字之図」で、その見え方の違いを太陽・地球・彗星の位置によるものであることを示している。さらに、彗星が現われまた消えるのは、太陽の光が届く「見界」と届かない「暗界」を周回しているからだとする考えを示し、彗星の出現は決して「奇異ノ變ト云フコトニ」あらずとした。殿村の説は今日からみれば取るに足らないとしても、「観象測量」にもとづいて彗星の何たるかを究めようとするものであったと言えるであろう。そして、自らの考えには「失考」「羞謬」も多いだろうからとして、真摯に「諸家ノ補正ヲ需」めている。

稲垣定毅にとっても、殿村庸行にとっても、彗星と吉凶禍福との関わりなど全く眼中にはない。それは、そのことを否定していたからであり、ただただ、天体・天文の実事の解明にのみ、彼らは興味を持っていたのである。

4d 山片蟠桃『夢ノ代』「彗星考」 山片蟠桃は『夢ノ代』「天文第一」に「彗星考」を著している。「彗星考」には文化4年の彗星の記録と「今年ノ彗星」(文化8年であろう。欄外注に「文化八年未七月ヨリ彗星西北ニアラハレ、八九月ノ

間ダンダン高く南ニ上リ、十月西南見ヘズ」とある))の観測記録が添えられている。もちろん、蟠桃は地動説に拠り、ウィンストン(William Whiston, ケンブリッジ大学ルーカス講座のニュートンの後継教授)の説を参考にしながら、「天文第一 廿六」において、彗星について「推歩」し、「彗星ノ如キハ五星ト行ヲ異ニシテ、其自行ナ、メニカ、リテ明暗ノ天ニ出没ス。ユヘニ明界ニ入レバアラハレ、暗界ニ入レバ隠ル」として、彗星が五惑星とは異なり、太陽の光が届く明界(太陽系。土星天までと考えていた。1781(天明元)年に発見された天王星をまだ知らなかった))の外の暗界まで巡る楕円軌道を運動していると認識していた。この点は殿村と同様である。さらに、「コノ星、日ノ光リヲウケテ、ソノ余光、日ニ背クノ方ニ長シ。星ヲ以テ頭トスレバ、余光ヲ以テ柄トス。ユヘニホウキノ名ヲ得タルモノナリ」と述べている。彗星が何らかの物体たる質(頭)を持つことを認識していることは確かである。しかし、「余光」が光芒(柄)だとする理解には無理がある。そして「彗星考」においては、太陽系の諸星・衛星の引力に言及したうえで、彗星が明界と暗界を巡る軌道上で「暗界ニアルヤメグルコト緩ルクヒロシ。故ニ数十年暗界ニアリ適々明界ニ入ルトキハ、彼太陽ニ引付ラレテ太陽ヲメグラザル事能ハズ。故ニ斜メニ太陽ニ引付ラレメグルコト一般、又暗界ニ出ルナリ」として、そのことを図示している。図示された彗星の軌道は、明界においては太陽を巡る楕円軌道であるが、暗界に出ると明界(土星天)に匹敵するほどの直径がある円軌道になっている[山片蟠桃, 1973, pp.201-4]。この図には他の恒星系も描かれており、蟠桃が理解していた宇宙像が分かる。蟠桃の『夢の代』は、ぜひ、「無鬼」まで読んでおきたいものである。

4e 再び、司馬江漢『春波樓筆記』 司馬江漢が『春波樓筆記』[1993]で、文化4年の彗星は「光芒も至りて薄く」としているのに対して、文化8年の彗星は「七月立秋の頃より、彗星初昏西北の方北斗の上に、大尊と太陽守との間に

麗りて尾の光芒長からず、亦曉東西に現われて尾の光芒長し」(p.90)と詳しく記しているように、4年の彗星と8年の彗星とは見た目の形状がやや異なっていたことが分かる。しかしながら、文化4年のほうき星も薄くとも尾の光芒を引いていたのであり、これを稲星と呼んだ例のあることはすでに確認した。

文化8年のほうき星が出現する直前の6月5日に熊谷辺りの60歳に近い百姓が江漢を訪ねてきた。彼が言うには「先生のところに、星の図あるよし」、人に聞けば「其星の図を以て、毎朝水を捧れば。家繁盛して災難を免るゝよし、此守を頂戴仕度」。日月星辰が人文・人事の吉凶禍福に係わっているとする信仰には抜き難いものがあったのであろう。これに対して、江漢は「一笑して」、星の図を「拝する共不拝とも、勝手次第なり、夫吉凶は星のあずかる所にあらず」と応えている(p.42)。西洋天文学を深めようとしていた江漢は、寛政5年(1793)版の「地球全図略説」で地動説に基づいた太陽を中心とする水星・金星・地球月・火星・木星・土星の周回円の図を示し、また寛政8年版の「和蘭天説」でも恒星天を加えた図を示し、五つの惑星の水・金・日・木・土は「皆星の名目にして天ニ五行アルニハ非ス」[1994, p.52]と注記し、天文と陰陽五行説との関係を断ち切っている。

江漢は、「天文学三道アリ」として、1) 星学、2) 暦算学、3) 窮理学に分類している。彼が追究していたのは、天文窮理学、つまり宇宙とは何かを究めることにあったのであろう。江漢は『春波楼筆記』に、幕府司天台の天文方である吉田氏及び山路(村)才助など「彼等は暦算家にして、天地の、窮理を知らず」と書き留め、自らが天文窮理学を追究していることの矜持を表わしている(p.94)。江漢は、寛政8年版の『和蘭天説』では同一の段落において説明していた彗星と夏月流星を、文化5年版の『刻白爾天文図解』[1994]に至って両者を明確に区別して、彗星を第1図で、流星を第29図で説明している。但し、流星についての説明は『和蘭天説』の内容を維持している(pp.221-2; p.236)。しか

しながら、「^{ハハキボシ}彗星」が太陽を巡る「楕円軌道」を運動していること、彗星の尾は彗星と他の天体との位置関係によって異なって見えること(「尾ノ長短ハ火星金星彗星ノ躰度ニヨレリ」(p.241)は間違っているが)を説明しながらも(第1図の説明から, p.247), 彗星が物質としていかなる実体をもつのかを『春波楼筆記』を執筆した文化8・9年の時点では知らなかった。それが彗星・孛星について「西洋人といへどもいまだ推歩窮理せざる者乎」という文に現われている(p.90)。江漢は天文台の洋学グループと疎遠であったのであろうか。

江漢は、文化13年板行の『天地理譚』[1994]において、彗星が「五星ト亦別ニシテ」「日輪ト地球ヲ囲テ旋ル」楕円軌道を巡ることと、「此五星ノ類ニシテ別ナル者ナリ」との理解に至っている(p.317)。江漢が『天地理譚』で、「吾日本人ノ天理ヲ知ル者鮮シ、故ニ(地動説など西洋天文学の諸成果を)信スル者モ又ナシ」としていること、それでも「近年天学ヲ好ム者」があるが「曾テ書ナシ、故ニ天経或問ヲ以テ云者鮮シトセス」と述べていること、さらに「日本窮理ヲ不好」(p.283)としていることにも注目しておくべきであろう。ここから、近世日本社会において天文地理に関する近代的合理的思考が容易に受容されなかった状況が窺われる。

5. 文政2(1819)年のほうき星と『猿猴庵日記』

文政2年5月にほうき星が出現したことについてはいくつかの記録がある。

陸奥国弘前(津軽)藩の山形宇兵衛は『本藩明實録・本藩事實集』[2005]に、5月21日「西戌之方江彗星現出候」と記録している。さらに、この年の弘前藩は「当年ハ豊熟申候様」であると11月15日の条に記している(pp.50-1)。

陸中国和賀郡沢内では、『沢内年代記』文政2年の条に「五月末ヨリ彗星」(白木野本)[沢内村教育委員会, 2000, p.99]と記録されている。この年の作況については、「世中上作。秋揚当分吉」(東郷本), 「世ノ中上々作」(下巾本), 「田畑

Mar. 2025

天に軌道がある如く (3)

共ニ上作」(白木野本)と記され、豊作・豊年であったことが分かる。

さて、尾張藩士猿猴庵高力種信の日記『蓬左見聞雑著』(国立国会図書館デジタルコレクション)・『金明録』[1986]・『猿猴庵日記』[1972; 1981]にも文政2年のほうき星の記録がある(『国立国会図書館所蔵『蓬左見聞雑著(巻十三)』』には天明3年末に出現した彗星について、天明4年正月の条に「初春方異の方に珍星顕れる、箒ぼしのちいさきやうなり」と、『金明録』・『猿猴庵日記』には文化4年9月に出現した彗星について「此比、毎夜夕方、西南の空に、申の方へ、彗星あらわる」[1986, p.209; 1972, p.232]と、文化8年7月に出現した彗星については「廿日過比より、戌亥の方に珍敷星見ゆ。暁には丑寅に顕れ、夕方宵之内は戌亥に顕れる。は、き星共、色々風説す。(慥には)は、き星共見へず、光明うすく大きし(也)」[1986, p.268; ()内は1972, p.299]と、それぞれ記録されている。文化8年のほうき星については、人々が様々な見方をしたことが窺える。この時の幕府天文方の「御届書付」(8月14日)には「彗星」、また9月18日「陰陽寮勘申」でも「彗星乎」[大崎正次編, 1994, pp.490-1]]。

[杉岳志, 2005, 表一]には、「稲星」表記事例として『名古屋叢書三編 第十四巻』『猿猴庵日記』をあげている。これは先にあげた『金明録』であるが、文政2年5月22日の条の次に、「一兩日已然より、亥子の方に珍星顕る。夕暮より五ツ比前迄、見ゆる。光薄き稲星也。十日程にてきゆる。」[1986, p.401]と記されている。この『金明録』は中村新三氏所蔵本を底本にしたものである。それに対して、国立国会図書館本(「寛政文政間日記」)を底本とした『猿猴庵日記』[1981]には、同様に22日の条の次に「此頃、戌亥の空に珍星あらわる。夕暮れに見ゆ。は、きぼし也と沙汰す」(p.588)とあり、「は、きぼし」と記されており、「稲星」は見えない。両書の解説にあたった織茂三郎[1986, pp.7-23; 1972, pp.88-9]によれば、いづれの底本も写本であり、国立国会図書館本は「文政日記大略」ともさ

れていて別に何らかの高力種信の「より詳細な別録」があったのではないかとしている[1972, p.88]。しかしながら、国立国会図書館本のほうは、『金明録』が文政5年までであるのに対して文政9年まで続いていること、多くの挿絵がありしかも終わりの方は高力の自筆であろうと見られること、自筆の奥書があるなどの特徴がある(同上)。両書間に文章の異同があり、また記事の順序が異なる部分がある。文政2年の大地震の記録は『金明録』のほうで、はるかに詳しい(「百年以来には無之大変也」(p.402)という地震のことについて或天文者に尋ねたという文言がある。ひょっとしたら、ほうき星のことについても尋ねているかもしれない)。しかしながら、この文政2年のほうき星の記述のように異なることはあまりないのではないかと。詳細な比較検討はできないが、[杉岳志, 2005]はこうした書誌に関することには全く言及していない。

なぜ、国立国会図書館本『猿猴庵日記』の文政2年のほうき星の記述に「稲星」がないのであろうか。「は、きぼしと沙汰す」とあるから、人々がこのほうき星を巡って様々な議論をしたのであろう。文化8年のほうき星について「色々風説」したように。さて、文政2年は「当秋豊年にて、米至て下値也、屋敷方困窮なり」[1981, p.592]であった。『金明録』の文政2年附録には「当歳、諸国一統、津々浦々に到る迄大豊年二而して、米穀大下値故、下民、殊の外、豊也」[1986, p.418]と誌されている。このことからすれば、[杉岳志, 2005]がいう「稲星フォークロア」が現実のものとして人々に実感され、『猿猴庵日記』にも「稲星」が現われてよいはずである。何故に記述が違うのであろうか。国立国会図書館本は名古屋の代表的貸本屋「大惣」旧蔵本で、しかも高力自筆の挿絵や奥書があるとされることがからすれば[織茂三郎, 1972, p.38]、この本の校訂を高力が行ったことを想定してもおかしくはないであろう。文政2年ほうき星についての日記部分が違うことを見逃した可能性もあるが、豊年であっても武家方・「屋敷方困窮」であったこと、6月12日「未の刻頃、

大地震。百年以来には無き珍事なり」があり、その後大雷が打ち続いたこと(この地震は伊勢美濃近江を中心としたもので伊勢海、琵琶湖の沿岸の被害は特に甚だしかったという[青木滋一, 1956, p.256]。『近江国鏡村玉尾家永代帳』にもこの地震について「先代不見聞の大地震なり」と書き留められている[1988, p.248])。「よい歌を誰ぞよんだかあめつちの / しきりにうごくじしんかみなり」[高力種信, 1972, p.598]という落首さえあった), こうした天変地妖のために「稲星」という表現ではなく、「は、きぼし」と言い表したのではないだろうか。

6. 西洋天文学知の展開

6a 松浦静山『甲子夜話』 肥前国平戸藩主静山松浦清の随筆『甲子夜話』を読むと、文政8年のある日の事として、「頃日古紙中を搜て、小記を得たり」として「彗星考 土御門陰陽権助(安部晴親)」を引いている。その部分は、陰陽師安部晴親による文化8年の彗星についての「勘文」である。この「勘文」によれば、彗星は様々な災厄をもたらす可能性をもっているが、このたびの彗星は殊に「微星」にして「災異」に足らず、程なく「消散」するであろうという[1978a, pp.270-2]。松浦静山はこうした陰陽師の判断を信じていたのではない。それは、次のことに明らかである。文政6年「十一月より東方に彗星出づ」と聞き、「余は渴睡漢」であると言いながらも、早く起出てこの彗星を自ら見ようとした。ところが、「陰雲に蔽はれたるか」見ることができなかった。「極月廿五日の夜に至て、初更の比始て見たり。然ども光芒殊に微にして、長さ三尺ばかりと覚ゆ」と記している。そこで、この彗星のことについて「司天館の知る人に問」いたところ、その答えのなかに「尤も祥災等のことは、陰陽家の説にして、妄誕難信」とあることを引いている[1980, p.180](静山の筆の師が高橋景保であったという[土屋久・小野文雄・広瀬秀雄編, 1981, p.91])。西洋文明・文化に親しみ、洋学にも大いなる興味を有していた松浦静山の合理的思考がここに現われて

いると言えよう。静山は文政8年8月にも「彗星」を実見し、彗星の観測結果を司天館に問い合わせていることを付け加えておこう[1978b, pp.125-6]。

6b 吉雄南臯『遠西観象図説』 『遠西観象図説』[1972]は、吉雄南臯(耕牛の孫にあたる)の講述を草野養準が文政4年に筆記し篇録したものを、吉雄南臯が文政6年に「観象塾蔵版」(観象塾は南臯の塾)として出版したものである。養準の「題言」によれば、この講述された天文学は馬場佐十郎訳『泰西彗星論訳草』の原書著者であるイギリス人Benjamin Martinやオランダ人Johannes Florentius Martinetの説に主に依拠したものであるが、志筑忠雄訳述『暦象新書』の原著者ケイル(John Kiell), 山片蟠桃『夢の代』「天文第一」が主に依拠したウイストン(William Whiston), あるいは奈端(ニュートン)の説も出てくる。

彗星については「尾星」の項で講述されている。叙述の順とは違うが、1) 尾星には漢名として「彗星」、「孛星」が、西洋名として「鬚星」、「劍星」があげられ、また「馬尾二象アルヲ毛星」と言うとして、これらの名称のいづれもが彗星の見た目の「象(かたち)」によるものであるとしている。2) 尾星は「一種の游星」で、太陽を旋回する長楕円軌道を運動し、游星天(太陽系)外に出て他の恒星天の恒星を繞って周回しているとする。彗星が太陽を周回する長楕円軌道を運動することは確かだとしても、他の恒星天まで周回することは確認されていない。3) 彗星の数は数限りなく多く、「但来テ吾太陽ヲ旋ルモノヲサヘ、其数ヲ究ムルコト能ハザルナリ」。そして、その軌道の「所在、長短、濶狭各同ジカラズ」であり、そのため軌道を一周するのに要する時間も異なる。4) ニュートンの説として「此星性甚ダ堅実ニシテ油氣ヲ含ムト云ヘリ。故ニ来テ太陽ニ親シム時、熱氣ニ燦セラレ其油溶解シテ焰状ヲナシテ、恒ニ太陽ニ背キ蒸發シテ尾状ヲナス」と述べている。彗星の本体が物質であることと、それが油気を有していて、その油気が太陽から受ける熱気により蒸発して尾の

Mar. 2025

天に軌道がある如く (3)

光芒を形成するとしている。これは馬場佐十郎訳『泰西彗星論訳草』にも出てくる説であるが、果たしてどうであろうか((ニュートンは、a) 彗星の本体は、惑星の本体同様、硬い、質の密な、凝固した、永続的なものである。b) 尾は彗星の頭部または核が太陽の熱によって放出した極めて微細な蒸気(光を反射する媒質である物質)にほかならないと推断する[ニュートン, 1997, pp.537-47])。5) 彗星を見ることができるのは、彗星が游星天(太陽系)内に来てからであるので、「古人コレヲ地上ニ属スル流星ノ一種トシ、或ハコレヲ以テ天災・地変ノ候トセシガ(和漢ニ此説アリ、西洋モ亦同ジ)」、つまり彗星を天変地妖の前兆とする説は洋の東西を問わずあったが、「後世ニ至リテコレヲ推歩スルノ術ヲ得テ、予ジメ其出没ノ年月及ビ方位等ヲ察シ」、つまり天文学の発達により彗星の軌道計算が可能となりその出現を予測することができるので、「今ハコレヲ天象ノ常トスルコトニナレリ」。天文知の発達によって、彗星の出現は天文現象として常にあることが了解され、もはや彗星を天変地異の前兆とすることはないとしている(pp.153-5)。このように、『遠西観象図説』における彗星論は、わが国における文政初期までの西洋天文知受容の水準を示していると言えるであろう[広瀬秀雄, 1972a; 1972b]。

7. 文政8(1825)年の彗星をめぐって——越後国の状況・『永世庚申帖』などから

7a 『永世庚申帖』『やせかまど』を著した太刀川喜右衛門は三島郡片貝村の庄屋であった。その片貝村から東南東へ地図上25km足らずの魚沼郡塩沢村(現南魚沼市塩沢)には、『北越雪譜』で名高い、質屋・越後縮の仲買を営む鈴木牧之がいた。牧之は商人を中心とした10人で長恩寺を宿にして庚申講を結び、講中は文政7年から「風俗」の変遷、「珍説奇談」、気象、「世の吉凶の年柄」などを誌した『永世庚申帖』[1983]を残した。この『永世庚申帖』のなかに文政8年の彗星に関わる記述とその年の作況が記され

ている。牧之は田地を有していたし、また町役人としても米の作況及びその値動きには常に配慮していた。

文政8年の彗星について「文政九戌とし末講 大左翁書」として、「去酉年」「又八月廿日頃より、辰巳の方より、子丑の方へ先向へ、彗星出る、但し九月十日頃迄ニ自然と散ず。夜ニ依て能く顕し時は、二三間計リニ相見へ候事」(p.112)と記している。[日本学士院編, 1960]は文政8年の彗星について「問家記録その他」によって、「8月8日」から2ヶ月間、「暁、北斗」方向に見られたとしており(p.454)、『永世庚申帖』の記述とほぼ一致している。大阪市史史料『あすならふ』[1988]は「九月上旬より彗星異方、後坤の方」と記録している。この年七月、「濃州洪水」であった(p.89)。また、陸前国加美郡中新田村の氏家「備忘録」[1997]の文政8年のものには、「八、九月頃ホーキ星度々出テ不思議ナリ、月ノ末終リ」とあり、彗星を「ホーキ星」と記している(p.782)。同中新田村の医師草刈玄水も、この彗星について、「暦書述日誌」[1998]に「八月廿日頃ヨリ、此星初め戌亥ノ方向へ向、毎夜ヌタリ、光イタリテうすく、十月初めニキヘ申候」と書き留めているが、その名は記していない(p.710)。

この彗星を「いなほし」と呼んだ例がある。高力種信の『猿猴庵日記』[1981]文政8年8月23日の条には、「此頃、辰巳の方に珍星あらはる。いなほしといふ。」として、核があり光芒が上向きの珍星の図が描かれている。この年は地震がしばしばあったほか、8月13日には「巳の刻過頃より、大風めく空にてさわかし。夜、大雨。美濃路、大水。流死の者、数しらずと云」という自然災害があった。この年の農作物の作況に関する記事は見られないが、11月28日の条に「今年米高値にして、町家甚不景気也」、12月の条に「当暮米値段高く、知行所村々ひけ多くして、屋敷方も難渋し、町家は大つまり也」の記述がある(pp.636-7)。「村々ひけ多く」とあるから、不作のために年貢の減免がなされたのであろう。「稲星」といっても、豊年でないばかりか、むしろ

ろ世の中一統不景気であった。高力が「稲星」と吉凶禍福を関連付けていたようには見えない。

7b 文政8年の作況 鈴木牧之は下女に片貝村出身の女(『永世記録集』によれば、文化11年から13年まで) [1983, p.54; p.55; p.57] を使っていたこともあるし、商い上関係した御機屋・縮織婦などを通じて「稲星」ということも聞いていたかもしれないが、『永世庚申帖』にはそれに類したことは書かれていない。文政8年の作柄について「牧之云」「同年七月中旬より、天気快晴稀ニ三日共続候日和無之、早稲・中稲ハ見事ニ候処」、つまり彗星が現れる以前は早稲・中稲とも豊作であった。がしかし、「節ならず八朔前後寒冷故、晩稲の穂揃ひ甚悪相見へ、些心配致、仲秋五日の夜、予が講元ニ而既ニ日和乞杯願ふ風聞も有之候」であった。8月に入ると天気が寒冷となり晩稲の穂が十分に育たず不稔・不作となる心配が出てきた。その時、彗星が出現したのである。牧之の記述を継ぐように「青藤(青木藤兵衛)云、前に牧之翁之御書立之通、仲秋頃迄ハ豊作に相見へ、夫より相続き雨天にて、田畑共に青立多く、作毛六分位之取上ケに御座候。当国は左程之義にも無之候得共、近国不作、分けても上州・信州至極之不作……」(pp.109-10) と記されており、八朔までの豊作の期待も空しく、彗星出現後は、田畑は不稔で青立多く、六分作に止まる不作であった。越後は左程でもなかったとはいえ、近国は不作であった¹⁾。

陸中国稗貫郡花巻では、『又右エ門文書 年代記』, 1991, p.47] によれば、「七月廿日式百拾日御座候共稲穂少モ出来不申不作年也」であったうえに、この年「殿様御卒去」という不幸に見舞われた。

陸中国和賀地方も文政8年は「凶作」であった。『沢内年代記』[沢内村教育委員会, 2000, pp.105-6] によれば、「凶作」(巢郷本)、「當作青立(不稔)・「六月四日土用入大冷ト成ル、續テ類ニ降り氣候甚タ不順ニテ稲穂出カラキスル、皆出ナカレ青立多ク有」(下巾本)であった。そのため、年貢も「元歩六歩引き」(巢郷本)であっ

た。

伊豆国君沢郡南江間村(現伊豆の国市南江間)の旗本大久保氏の名主を務めた津田家「諸用一代日記」[1996] 文政8年の条に、「米拾石 御用捨引」「米五石 御拝借米」と記録され、「文政八西暮役割之セツ、惣百姓ハ当年之儀凶作格別之骨折ニ付」という文言が記されている(p.138)。同郡長瀬村(荻野中山藩領分、現伊豆の国市長瀬)の内田家には、文政八酉年九月に古奈御役所宛ての「長瀬村被災不作見分願」[2004] が残されている。これによれば、「当夏中多分の虫付」があり、虫送りなどをしたが「退不申」で、そのため作物に被害が出た。それは晩稲についても同様に、虫喰い・立枯れが「殊之外多分ニ相見」える被害が生じた。さらに8月20日の「大雨ニ而出水仕り、山土押出し土かむり」になった場所もあった。これらの被災のため「此節ニ而者漸半毛位之作与心構申候」状況に立ち至り、「寔惣百姓一同難儀仕り十方ニ暮罷在候」なので、減免租となることを意図して、「御慈悲」をもって「急々御見分」をなされるように願い出た(pp.371-2)。

駿河国志太郡中新田村(田中藩本多氏領、現焼津市中根新田)では、「飯塚兵左衛門一代記」[1996] によれば、文政8年には「七月盆頃より大虫付」のため領主より「毒荏油」が下されたほか、虫送り・火送りなど様々な対策がなされたが効果がなかった。虫食いのため作柄は悪しく、「当年早稲晩稲検見」がなされ、「当村四拾三俵相引申候」と減租がなされた(p.817)。

近江国蒲生郡鏡村では、『玉尾家永代帳』[1988, p.270] が伝えるところでは、「当西(文政8)年夏中雨天続ニ而当村ヒクミ分皆無」であったという。ウンカの発生により、それが「稲かぶニ付き」「稲かれ」などの被害をもたらした。また、『玉尾家永代帳』は「当年諸国共雨繁ク、関東ハ別而不作と申事ニ御座候」であったと記している。

文政8年の彗星については、越後や関東においては、『やせかまど』『言』とは逆の状況であった。むしろ「荒蒔村宮座中間年代記」の「いつニ

Mar. 2025

天に軌道がある如く (3)

而も北ニほうきほし出ル年」は「乱国」となるといふ「伝承」こそ現実態に合っていたのである。

ところが、おもしろいことに、「荒蒔村宮座中間年代記」[1958] 文政 8 年の条には、ほうき星についての記述はないが、「此年米値段高下之儀ハ当国西国筋ハ豊年ニて候得共北国関東筋ハ大不作ニ付高下之噂有之候」(p.433) とある(阿波では同年 8 月 13・14 日「車軸を流す程の大雨夜に入り殊の外の水害」、また「沖縄、紀州、中部地方に大雨洪水」があった[徳島地方気象台, 2017, p.28])。南北に長い列島の地域によって作況が異なることがあるのは当然のことである。これでは、「荒蒔村宮座中間年代記」の文化 8 年の記述に見えた「伝承」も現実によって覆されたことになる。「伝承」は場所と時間によって限定されているのである。「ほうき星」が吉凶いづれかの前表であるといった「伝承」は現実によって容易に覆され、打ち碎かれるのである。さらに、人々が近代的、科学的天文学の認識を持つことによって、一層そうなるのである。

8. 天保 14 年 (1843) 白気・ほうき星をめぐって

8a 天保 14 年の白気・ほうき星の諸記録
天保 14 年 2 月に彗星が出現したことについても記録が残っている。弘前藩士山形宇兵衛は、[2005, p.348] 同年 2 月 19 日の条に「頃日毎夜六ツ半方南方ニ白布を引候如キ雲、西方東へ中天へ張り、四ツ過ニ及候得ハ消申候、其形布を真直ニ横ニ引く如く色白く、雲氣之様ニ見得申」と「白気」が見られたことを記している。これは彗星の本体＝核がよく見えず、その光芒ばかりが見えたためである。そのため、「色々世間取沙汰も有之候得共、慥成咄もなく匈々申唱候」であったという。この天文現象をしかと認識し、理解できる者もなく、ただ何となく恐れていた様子が窺える。

陸前国加美郡中新田村の医師「草刈玄水暦書込日誌」[1998] の天保 14 年のものに、「二月始より」「白雲ニもヤヌノ引羊申ニアタリ白雲如

ク見ヘル、仍てはハタ雲と云、世上色々ヒヤウハンス……誠ニ不思議ナル奇雲也」,「日暮れより夜ニ入り見ユ、日ノカケトモ云」(p.732) とあり、「白気」を「旗雲」と呼んでいる。尚、玄水は文政 13 年 10 月に出現した彗星についても「此星十月頃より相出、八ツ時ハヒキ(ク)クテ見ヌツ、セツ時高くナリテ相見ヌ、光ハ至って薄ク、中星ニて光ノ長サ三尺ハカリニ相見ヌ候」と記録しているが、この彗星を何らかの名で呼んでいるいなかった(p.716)。

江戸の町年寄の家に生まれ、国学者、考証学者といわれ、『嬉遊笑覧』などの著作がある筠庭喜多村節信はその随筆風手記『きゝのまにまに』[1977] にいくつかの彗星の記録を残している。文化 8 年 8 月には「八月初より北方に彗星出」(p.96)、文政 6 年 12 月には「彗星東方ニ出」(p.114)、文政 8 年には「秋の初、彗星東南ニ出」(p.121) と簡潔に「彗星」と記している。天保 14 年の彗星については「二月六日夜より、南の空ニ白気一道立」(p.147) と記録しており、彗星を見た目の現象によって区分して記述しているのは多くの書物に触れてきた者らしい(嘉永 6 年のほうき星については後述)。

駿河国富士郡大宮神田町(幕府領、現富士宮市大宮町)の横関家『袖日記』は天保 14 年から記録されたものであるが、『袖日記壺番』の末尾に文政元年以降の簡潔な年記録が付されている。その最後に天保 14 年のこととして「未申方ニ白気立筋違ニ棹ノ如ク長三丈」と記されている[富士宮市教育委員会, 1997, p.24]。

大和国葛下郡桑海(くわのみ)村(郡山藩、現葛城市葛木)に残された「諸事記録帳」(和田周一文書)[1983]によれば、「天保十四歳卯二月五日夜暮六ツ時より西の方地下より雲ニ而もなく、けむりニ而もなく筋立幅壺尺斗ニ而長サ凡壺丁斗、地より拾間斗も上ニ而、西の方より辰巳方へ夜四ツ過より次第に地下へ入ル夜九ツ過ニ減ス、廿七日まで凡廿日間尤最初とハ後次第ニ薄く相成候」と、「白気」とは書かれていないが、その様子が記録されている(pp.489-90)。

播磨国加古郡野添村の『御月見日記』[1984]

天保14年の条には、「当二月三四日頃よりふしき成ル図（右端には彗星の核がなく、光芒のみが左に向かって半ば扇を広げたような「白氣」の図）の通成雲出、申ノ方辰の方ニ向テ出候、色ハうすあかく成さゝらの如成雲、段々うすく成候而二月廿七八日頃ニきゑうせ候、誠ニふしき成雲……」（p.50）と記されている。ここには「白氣」とも「彗星」とも書かれていないが、図から「白氣」・「彗星」であったことが分かる。

天保14年の彗星を、「彗星（ケイセイ）」あるいは「ホウキ星」と記した記録もある。『近江国鏡村玉尾家永代帳』[1988, p.348]には、「二月三日頃方、暮早々方申ノ方下方上、辰巳之方角へ筋違ニ幅壹尺ニ長サ三丈斗リ之白雲、毎夜たな引」、「二月廿日頃方丈ケ長ク相成候、四月頃自然と見へ不申」とあり、「白雲」＝「白氣」が見えたことと記されている。また、京都においても同様にこの「雲」が見え、「何共（奇）怪之雲」と「評判」しているとされ、さらに、或人曰として「彗星ト申よし」と書き綴っている。ここに「彗星」の文字が見られる。

陸前国加美郡中新田村の氏家家「備忘録」[1998]には「此年二月中ホーキ星現ハレ大ニ寒ジ、種物節遅レトナレリ」とあり、同じ村の草刈玄水が「白雲」と認めたのとは違い、彗星を「ホーキ星」と呼んでいる（p.788）。

陸中国和賀郡沢内の『沢内年代記』には、「式月十九日夜ヨリ西ノ方ホウキ星此ノ星ノ光リ金色ニテ光ルアタリハ紫ノ雲タナヒキ、毎夜出ル事不思議ナリ」（下巾本）[沢内村教育委員会、2000, p.123]とあり、「ホウキ星」と認識していることが分かる。この年の沢内地域は「世ノ中上々作」（下巾本）とも、「中作」（白木野本）ともされているが、藩からの上納御用金が「一ケ年三度」（下巾本）も「水呑ニ至迄」仰せ付けられ、「諸人迷惑ス」（巢郷本）・「御百姓共一同迷惑スル事カギリナシ」（下巾本）であった。

8b 幕府天文方『彗星出現記 附白氣考』
こうした「白氣」「ホウキ星」が出現するなかで、幕府天文方はこの天文現象についての下問を受け、それに答えた文書を残している。そのなか

で、天文方足立左内の「彗星考」及び同じく天文方渋川助左衛門の「白氣考」を合わせた『彗星出現記 附白氣考』が宮内庁書陵部に所蔵されている（マイクロデジタル、国書データベース）。『彗星出現記』の初丁には「天保十四年二月薩州」で観測された彗星の様子を図示しており、それが彗星であることが確認できる。天文方二人への下問の趣きは、渋川の「白氣考」によれば、「此節、西より南に掛け薄暮より白氣見候。右は白氣ニ候哉、星ニ候哉、吉凶之兆ニも候哉」、つまり一つは白氣が見えるがこれは「白氣」なのか、それとも「星」であるのかということであり、もう一つはこの天文現象は何らかの吉凶禍福の前兆なのかということであった。

この下問に対して、天文方渋川は「白氣考」と題する書上で回答し、まず、「是は星ニ而は有御座間敷」つまり「星」ではなく、西洋で近來言うところの「黄道光」の類いであろうとした。但し、後で述べるように「僅ニ兩三日見留候而已ニて未だ朧と治定仕兼候」、二三日観測しただけなので「星」であるのかどうかについては確たることは申し上げられないので、「篤と見留候上、治定之趣可申上候」、しっかりと見定めたうえで再度回答するとしている。二つめの下問に対しては、「黄道光」であっても、これは光学的な現象で、「格別珍敷儀」ではないので、「人事之吉凶に拘り候事には毛頭無御座候」と明確に回答している。

天文方足立左内は「彗星考」と題する書上で回答している。2月7日の観測では「西南之方ニ彗星光芒」であろうか、「白氣」が見えたが、「朧と彗星共難見定」。それは地上に長い光芒が見えるが、「猶地下之」光芒の「長サ難計」からである。足立は「白氣」が彗星の光芒であり、彗星の本体＝核は未だ地上に顕れていないと考えたのであろう。8日の観測の結果、これを全く「彗星」とであるとした。そして、光芒の長い彗星の事例として延喜5（905）年4月の彗星と明和6年7月の彗星をあげた。下問の二つめについては、彗星を「古来方凶兆之由」と言い伝えて来ているが、西洋の天文学が示すように「彗星行

道ハ天」にある、つまり「天に軌道がある」のであり、それは「天変災害之儀ニ而は御座有間敷奉存候」、つまり彗星は天変災害とは拘わらない、人文・人事には拘わらないと答えている。

このように、幕府天文方の足立、渋川の両名は、「白氣」や「彗星」の天文現象と天変災害、人事の吉凶禍福とは何ら拘わらないことを西洋天文学の知に拠って、合理的判断として述べているのである。

V 物語の終焉にむかって——『袖日記』などの彗星についての叙述をめぐって

1. 嘉永 6 (1853) 年のほうき星をめぐって

1a 嘉永 6 年のほうき星の諸記録 嘉永 6 年 7 月に彗星が出現した。紀州藩藩校学習館督学であった川合梅所の妻小梅が綴った日記『小梅日記』[1981] 同年 7 月 22 日の条は、「いつの比よりかしらね共、盆頃より人々ほうき星出るよし申合、夜前いぬゐの方にあたり、如此の星(核を下にして光芒が上向き一間計に見える様を図示)、色至ってうすく白色にみゆ」(pp.111-2) と記述している。また、文久元 (1861) 年 5 月に現われた彗星についても「ほうき星」と記し、その図(核を下にし尾の光芒が真上から右斜め上に伸びている)を添えている。そこに「ほう年星也杯言て悦ぶ者も稀には有」、「天子に御うらなひ有之処、先不宜、大地しんか大雨、いづれ御つつしみとの事のよし。かるき者らはほう年星と唱へ、菓子うり杯ほう年踊りしてうりあるく」と書き認めている (pp.264-5)。

大和国山辺郡福知堂村 (現天理市福知堂町) 『福知堂村手覚年代記』(乾家文書) [1977] 嘉永 6 年の条は、「五月中頃より六月中比迄、暮れ六ツ時西手山より三四間上ニほふけ星出るなり」(p.549) と記録している。

大和国十市郡山之坊村 (現橿原市山之坊町) の『甚太郎一代記』[1994] は、嘉永 6 年「七月十日頃方西戌ノ方へほうき星出申候、最早下旬ニハ相見へ不申候、右善悪共前表相分不申候」

(p.214) と記録している。彗星を「ほうき星」と呼び、そしてほうき星をめぐって吉凶禍福の前表とする様々な伝聞があったが、いずれが正しいのか「分からない」と表白している。「相分不申」ということには、ほうき星が吉凶禍福に拘わらないのではないかという意も含まれるであろう。

出羽国村山郡高田村 (現山形県西村山郡朝日町三中高田) に残された「旧記」(鈴木鷹蔵所有) には、嘉永 6 年「六月箒星出ツ」[朝日町教育委員会, 1981, p.146] との記録がある。

大阪市史史料『近來年代記』[1992] 嘉永 6 年の条には「彗星顕給ふ事」という項がある。「七月十八日比方戌方当て、暮れ六ツ時方現れて初夜迄ニ入給ふなり。星姿(核を下にし光芒が上に伸びた)如此ニして少シ小ニして色赤シ、光少くして上へノ光り五尺計り見ゆ」と彗星の有様を記したうえで、「是うわさ取々申一向わかり不申候」と人々がこの彗星をめぐって様々な噂をしているが、筆者自身は判断ができないと述べている。そうした噂のなかで、「或人曰、是八年ノ廻り合せニよって出給ふいね星なり、豊年の印なり」(p.66) と申す者があったとしている。「年ノ廻り合せ」とはどのようなことであろうか。嘉永 6 年は癸丑であるので、嘉永 4 年辛亥・嘉永 5 年壬子の「亥子(いね)」の翌年という意味であろうか。寛保 3 年癸亥・寛保 4 年甲子のほうき星(この場合は甲子の革命)、明和 4 年丁亥・明和 5 年戊子の翌年のほうき星のように。『近來年代記』は、安政 5 年の彗星については「ほうき星顕れ給ふ事」(p.90) という項で記録しているが、ここには「いね星」などの呼び名は出てこない。

江戸の喜多村節信は『きゝのまにまに』[1977] 嘉永 6 年 7 月 15 日の条に「戌亥の方に中りて彗星出る。俗説稲星と称す。諸国豊年此印、明和六年ニ此星西南に見へしと云、光芒長からず、夜毎に低くなりて無程ミへず」(p.185) と記している。喜多村本人は彗星と呼んでいるが、俗説に稲星と称するとしている。俗説は何故に明和 6 年のほうき星を引き合いに出しているの

であろうか。ほうき星が軌道を進むのに従って見える方角が変化するとはいえ、明和6年時の「西南」と嘉永6年時の「戌亥＝北西」とは異なるので、ほうき星が見える方角によるものではない。では、何故か。『近來年代記』にあるように、「年ノ廻り合せ」なのであろうか。「年」・「暦」の廻り合せによる「亥子＝いね」なる語呂合せであれば、これは「いね星」であり、出現する「暦」・「年」が限られることになるし、漢字で書けば「稲星」と同じであっても、ほうき星が「いな束」のように見えることからそう呼ばれたという「いな星」とは異なることになる。

1b 『袖日記』の記録 駿河国富士郡大宮神田町の横間家・枅弥(商家・酒造家)『袖日記 五番・六番』[富士宮市教育委員会, 1998]の嘉永6年の彗星についての記録を追ってみよう(pp.82-9)。彗星の記事は7月19日の「今夜初テ見出ス ハウキ星西方へ出ル 戌方」で、北西の空に「ハウキ星」が出現したというものである。同日の条にはさらに「今夜五ツ半時迄大宮町方戌ノ方ニ当リ 山の端方壺丈斗り高キ処此星真直ニ光をはなつ(核を下にし光芒の尾を上へ伸ばした図が入る) 其色白シ 五ツ半頃山陰ニ入て見へず 彗星(ハウキホシ スイセイ ケイセイのルビを付ける)」「此已然の白氣ハ申ノ方也」と記し、出現した星が「彗星」であり、「ハウキ星」であることを認識しており、しかも「白氣」が彗星の光芒であったことも理解している。

続いて、20日の条に、「今夜夕刻ハウキ星昨夜此処へ出ル 其足はやくして忽山端ニ入 尾ノ長サ凡壺丈ばかり」とほうき星の様子を記した上で、「ハウキ星を或人豊年星なりと評す又ハいづれ天変凶也と申人もあり」と書き留めている。ほうき星をめぐる人々が吉凶様々な前兆であるかのように述べていることを記録しているが、それが何に拠って吉であり凶であるのかは書かれていない。枅弥自身がいづれかに与した様子もない。ほうき星についての記述は連日続き、21日の条には、「今夜ハウキ星出ル尾ハ下を向(核を上にし光芒の尾を下に伸ばし

た図が入る)如此也 忽山端ニ入五ツ前」。22日の条には、「ハウキ星雲隠 星の評判ニ將軍ニ変ある瑞と申候」とある。この時13代將軍家慶は不例であり、7月22日に死去、その町触れが大宮町に廻ったのは同24日であった。23日の条には、「彗星今夜も見ゆ 尾ハ上を向(核を下にし光芒の尾を上へ伸ばした図が入る) 見る内ニ山かけニ入る」、24日の条には、「彗星雲かげ、將軍様他界ニ付今夜町触ル」、25日は大雨のために、26日は曇り空のために、27日は曇り小雨のために、28日は山際に雲があるために、「星見へず」。8月5日の条に「此節ハ西方彗星見へず候」とあるのを最後にハウキ星の記録は見えなくなる。枅弥は彗星を注意深く観察しており、また一貫してハウキ星と記している。この時点では、ハウキ星と吉凶禍福と何らかの関わりがあるとする説のいづれにも与してはいない。

因みに、『袖日記』の筆者である枅弥は、嘉永2年2月からの大宮町での疱瘡流行時には多くの死亡児者を見たとし、また長男松太郎が罹患し、長期の療養を余儀なくされたこともあり[1997, pp.59-62]、嘉永4年2月19日に娘お花に医師中西秀斉(周才)による「種疱瘡」をさせている[1997, p.92]((この時期、この地域は葦山代官所江川太郎左衛門(英龍)の支配下にあった。英龍は嘉永3年正月に支配地伊豆国君沢郡北江間村(現伊豆の国市北江間)の子ども2人に伊東玄朴による種痘を受けさせ、さらに自らの娘俣に代官所御抱医である肥田春安による種痘を受けさせた。その結果を見て、2月には支配地に西洋牛痘種痘を奨励する「種痘奨励告諭」を触達している。肥田春安(伊東の八幡宮来宮神社神職、漢方医。江川家に仕官して蘭方医と交流。嘉永3年伊東玄朴から種痘法を学ぶ[『市史編さん こぼれ話 第45話 肥田春安の肖像』『広報いとう』No.1012, 2013年4月])は、領内の村々で種痘を行った[仲田正之, 1994, pp.49-52; 土屋茂朗, 1973, pp.310-2]。中西秀斉による「入疱瘡」は、文久期の『袖日記』からは、「入疱瘡」によってできた痘瘡の9日目(秀

Mar. 2025

天に軌道がある如く (3)

斉は8日目という)の痘漿をヒトからヒトへと刃針で植える漿苗腕接種法である。これは廣瀬元恭が著わした『新訂牛痘奇法』[1849(嘉永2)]にある牛痘接種法通りである。枅弥が娘に「種痘瘡」を受けさせたことと江川の「種痘奨励告諭」との関連は分からないし、また、中西がどのようにして「種痘瘡法」を身につけたのかも分からない。『袖日記(拾番)』の若林淳之解題[2001]を参照。但し、どういう訳か、嘉永4年2月に枅弥がわが子に中西秀斉による「種痘瘡」を受けさせたことについては触れていない²⁾。他にも、子に「入れほうそう」をする者はあったが、嘉永5年以降でも、付近の村々では痘瘡が流行し子ども達が死に至っている。嘉永7年1月北山村及び内房村で痘瘡流行(p.115)したことからすれば、枅弥が「牛痘」に対する迷信に陥らず、この地域ではいち早く「合理的」行動をとったことが分かる(桑田立斎は嘉永2年に『牛痘發蒙』を著し、自然痘・種痘噴鼻法・種痘発泡法・種人痘刺法・牛痘法を、徴候・死亡・危険・膿潰・時月價費・注意・救療・畸醜・餘患ごとに比較し、牛痘法が「上々吉」だとする「諸痘險易表」を掲げ、やさしく噛みくだいた文章で人々の牛痘法に対する蒙を啓くことに努めた)。

また、枅弥は『袖日記』に「北アメリカ共和政治国」艦隊の浦賀来航後に、「地球図ハ作州簀作の著ス弘化四未ノ板ヲ以テ正トス」との注記があったり(p.74)、来航してきたアメリカ艦隊の様子やそれに対する幕府の対応(お台場の建設など)などに強い興味・関心を払っている。これは、海岸防備のための夫役、国恩金、加助郷の賦課などがあったためでもあろうか。

注

- 1) 牧之も彗星に関心を持たなかったわけではない。牧之が天保6(1835)年8月24日に認めた書簡に対する山東京山(京伝の実弟で、牧之の『北越雪譜』の刪定・板行に関わった)の9月9日筆の書簡に「彗星ともいふべき変星の事、江戸にてハさらに見え不申ざりしや。巷説を不聞」[『鈴木牧之全集 下 資料集』、1983、p.324]とあるからである。

ここにある彗星は天保6年8月に出現したハレー彗星のことである[日本学士院編、1960、p.454；pp.460-1]。牧之がこの彗星に関してどのようなことを京山に尋ねたのかについては大いに興味をそそられることであるが、残念ながら、牧之の京山宛てのこの書簡は残されていないようである。牧之には絵心もあったから、ひょっとしたら、書簡中にこの彗星の様を描いていたかもしれない。

- 2) 解題にあたった若林淳之は、ヒトからヒトへと痘漿を腕接種していることから「人痘法」としてしているが[富士宮市教育委員会、2001、p.189]、「人痘法」((これを桑田玄真(穀里馬場佐十郎に師事、立斎は養嗣子)は「此種痘法は都爾格(トルコ)及び尾勒西亞(ギリシア)に於いて専ら行はる事久しい」[桑田玄真、1814]としている))と「牛痘法」の違いは、接種方法の違いではなく接種する「痘瘡種」・「痘苗」が「人痘」か「牛痘」かによる分類なので、おそらく死を含む重篤な結果を伴いかねない「人痘法」ではないであろう。中西周齋が嘉永期に枅弥の娘お花に行った種痘も、江川代官支配地で既により安全な「牛痘接種法」が行われている状況で、リスクの大きい「人痘法」をした可能性は小さいであろう。中西周齋が嘉永2年2月の大宮町での痘瘡流行前後には「種痘瘡」を行った様子は『袖日記』からは窺えない。彼は、いつ、どこで、誰から種痘術を学んだのであろうか。そして、その「痘苗」を誰から得て、どのように継承していったのであろうか([鈴木則子、2021]も参照)。

参照資料

- 青木滋一(1956)『奈良縣氣象災害史』養徳社。
- 朝日町教育委員会(1981)『朝日町史編集資料 第16号』「増補改訂 萬見聞記録」「増補長岡泰一郎資料」を所収。
- 『あすならふ』(1988)大阪市史編纂所『大阪市史料集 第24集 近世大阪風聞集』。
- 足立左内、渋川助左衛門『彗星出現記 附白氣考』宮内庁書陵部(マイクロデジタル、国書データベース)。
- 「荒蒔村宮座中間年代記」(1958)『天理市史 史料集』。
- 「飯塚兵左衛門一代記」(1996)『静岡県史 資料編12 近世四』。
- 稲垣定穀「彗星運行図(簡百耳尼久数窮理)」[「仮名彗星論」「彗星行度図」、津市津図書館稲垣文庫。
- 稲垣文庫に含まれる諸資料・文献(殿村庸行『彗星説』を含む)からの引用については、しかるべき手続きをとり許可を得た。諸資料・文献の閲覧及びコピーにあたって、レファレンス室に大変お世話になった。記して感謝の意を表する。
- 大崎正次編(1994)『近世日本天文史料』原書房。
- 大槻玄沢(1976a)『捕影問答』『日本思想大系64 洋学

上』所収。
大槻玄沢 (1976b)『蘭訳梯航』『日本思想大系 64 洋学上』所収, 岩波書店。
仲田正之 (1994)『江川坦庵』吉川弘文館。
『御月見日記』(1989)播磨町野添土地地区画整理事業完工誌編集委員会編集, 播磨町野添土地地区画整理組合発行。
『永世庚申帖』(1983)『鈴木牧之全集 下 資料集』中央公論社。
『永世記録集』(1983)『鈴木牧之全集 下 資料集』中央公論社。
『近江国鏡村玉尾家永代帳』(1988)国立史料館編集「史料館叢書 10」, 東京大学出版会。
『小千谷市史 史料編』(1972)。
織茂三郎 (1972)「解説 『猿猴庵日記』」『日本庶民生活史料集成 第九巻 風俗』三一書房。
織茂三郎 (1986)「解説 『猿猴庵日記』」『名古屋叢書三編 金明録』編輯名古屋市蓬左文庫。
片桐一男 (1969)「阿蘭陀通詞馬場佐一郎の天文台勤務とその業績」『法政史学』第 21 号, 法政大学史学会。
川合小梅 (1981)『小梅日記 1』東洋文庫 256, 志賀裕治・村田静子校訂, 平凡社。
喜多村節信 (1977)『きゝのまにまに』, 三田村鳶魚編『未刊随筆百種 第六巻』所収, 中央公論社。
『近來年代記』(1990)『大阪市史史料第二輯』大阪市史編纂所編集, 大阪市史料調査会発行。
「草刈玄水暦書込日誌」(1998)『新編 中新田町史 上巻』。
草間直方 (1911)『草間伊助筆記』大阪市参事会編纂『大阪市史第五』所収。
桑田玄真 (1814)『種痘新編』京都大学附属図書館, 富士川文庫, 国書データベース。
桑田立斎 (1849)『牛痘發蒙』大阪大学適塾記念センター蔵, 国書データベース。
高力種信 (1756-1831)『蓬左見聞雜著』(国立国会図書館デジタルコレクション)。
高力種信 (1972)『猿猴庵日記』『日本庶民生活史料集成 第九巻 風俗』所収, 三一書房。
高力種信 (1981)『猿猴庵日記』, 編集代表原田伴彦『日本都市生活史料集成四 城下町篇Ⅱ』所収, 学習研究社。
高力種信 (1986)『名古屋叢書三編 第十四巻 金明録——猿猴庵日記』編集名古屋市蓬左文庫。
佐藤昌介 (1976)「解説 洋学の思想的特質と封建批判論・海防論」『日本思想大系 64 洋学 上』, 岩波書店。
沢内村教育委員会 (2000)『陸中国和賀郡 沢内年代記 総集編』沢内史談会編集。
「山東京山書簡集」(1983)『鈴木牧之全集 下 資料集』中央公論社。
司馬江漢 (1993)『春波楼筆記』『司馬江漢全集 二』所

収, 八坂書房。
司馬江漢 (1994)『地球全図略説』・『和蘭天説』・『刻白爾天文図解』・『天地理譚』, 『司馬江漢全集 三』所収, 八坂書房。
『諸事覚書』(2014)大和国十市郡上品寺村上田家文書, 生駒市生涯学習グループ「古文書を読む会」『会報「いこま」 特別号』。
「諸事記録帳」(1983)『改訂 新庄町史 史料編』。
「諸用一代日記」(1996)『町史資料 別編一 津田家古文書』静岡県伊豆長岡町。
『甚太郎一代記』(1994)廣吉壽彦編『甚太郎一代記——無足人吉川家記録』清文堂史料叢書第 68 刊。
杉岳志 (2005)「書籍とフォークロア——近世の人々の彗星観をめぐって」『一橋論叢』第 134 巻第 4 号 pp.205-26。
杉田玄白 (1976)『野叟独語』『日本思想大系 64 洋学上』所収。
鈴木則子 (2021)「江戸の流行り病と人々のくらし——幕末の痘瘡と種痘導入をめぐって」『日本医学雑誌』第 67 巻第 2 号。
鈴木牧之 (1982)『北越雪譜』鈴木牧之編選, 山東京伝刪定, 岡田武松校訂, 岩波クラシックス。
『鈴木牧之全集 下 資料集』(1983)中央公論社。
「星学手簡」(1971)天文方高橋至時と間重富との往復書簡集『日本思想大系 63 近世科学思想 下』岩波書店。
高橋景保 (1811)『文化四年九月彗星略説／文化八年九月彗星略考』(東北大学附属図書館狩野文庫, 国書データベース)。
中央气象台・海洋气象台編 (1976)『日本の気象史料 1 暴風雨・洪水』復刻版, 原書房。
津市図書館 (2002)『稲垣文庫について』『津市図書館蔵稲垣文庫仮目録』。
土原久・小野文夫・広瀬秀雄編 (1981)『天文暦学諸家書簡集』講談社。
土屋茂朗 (1973)『静岡県の医史と医家伝』戸田書店。
『十日町市史 資料編 5 近世二』(1994)。
徳島地方气象台 (2017)『徳島県自然災害誌』。
殿村庸行 (1811)『彗星説』津市津国書館所蔵稲垣文庫。
「長瀬村被災見分願」(2004)「長瀬 内田家文書」『町史資料 別編二 伊豆長岡町諸家古文書(一)』収載, 静岡県伊豆長岡町。
中原孫吉 (1939)「『有吉記録』抄(災異編)」『海洋学会機関雑誌『海と空』第 19 巻第 2 号, 第 3 号, 第 4 号, 第 5 号』。
日本学士院編 (1960)『明治前 日本天文学史』明治前日本科学史刊行会, 日本学術振興会。
ニュートン (1997)『自然哲学の数学的諸原理』『世界の名著 31 ニュートン』責任編集河辺六男, 中公バックス。

Mar. 2025

天に軌道がある如く (3)

馬場佐十郎 (1811)『泰西彗星論訳草』国文学研究資料館, 国書データベース。
「備忘録」(1997)「氏家安吉写本曆書込日誌」『新編 中新田町史 上巻』。
廣瀬元恭 (1849)『新訂牛痘奇法』時習堂蔵版 (国立国会図書館デジタルコレクション)。
広瀬秀雄 (1972a)「洋学としての天文学——その形成と展開」『日本思想大系 65 洋学 下』岩波書店。
広瀬秀雄 (1972b)「解題 吉雄南臯と『遠西観象図説』」『日本思想大系 65 洋学 下』岩波書店。
『福島県史 第26巻』(1972) 総目録・写真図版目録・年表・索引。
「福知堂村手覚年代記」(1985)『改訂 天理市史 史料編 第1巻』。
『藤岡屋日記』(1987) 鈴木 棠三, 小池章太郎編『近世庶民生活史料藤岡屋日記』第1巻, 文化元年～天保7年, 三一書房。
富士宮市教育委員会 (1997)『駿州大宮町横関家 袖日記 (壱番・弍番・四番)』。
富士宮市教育委員会 (1998)『駿州大宮町横関家 袖日記 (五番・六番)』。
富士宮市教育委員会 (2001)『駿州大宮町横関家 袖日記 (拾番)』。
「凡例」に「本書の引用等にあたっては所有者の了解を得て行うこと」とあるのに従って, しかるべき手続きをとった。所有者及び教育委員会文化課市

史編さん室・学術文化財係の方々には大変お世話になった。記して感謝の意を表したい。
『又右エ門文書 年代記』(1991)『花巻市史 資料編 矢沢地区地方文書 其之一』。
松浦静山 (1978a)『甲子夜話 4』東洋文庫 333, 中村幸彦・中野三敏校訂。
松浦静山 (1978b)『甲子夜話 5』東洋文庫 338, 中村幸彦・中野三敏校訂。
松浦静山 (1980)『甲子夜話 3』東洋文庫 321, 中村幸彦・中野三敏校訂。
『やせかまど』(1972) 太刀川喜右衛門著, 『小千谷市史 史料編』所収。
山形宇兵衛 (2005)『本藩明實録・本藩事實集 (下)』『みちのく双書第47集』青森県文化財保存協会。
山片蟠桃 (1973)『夢ノ代』『日本思想大系 43 富永仲基 山片蟠桃』岩波書店。
吉雄南臯 (1972)『遠西観象図説』『日本思想大系 65 洋学 下』所収, 岩波書店。
若林淳之 (2001) 解題「『袖日記 (拾番)』について」富士宮市教育委員会 (2001) 所載。
渡辺敏夫 (1986a)『近世日本天文学史 (上)』恒星社厚生閣。
渡辺敏夫 (1986b)『近世日本天文学史 (下)』恒星社厚生閣。

(2024年11月15日掲載決定)